

専門教科「生活」の講義における自分自身への「気付き」

'Awareness' of oneself through the specialized course 'Life Environment Studies'

勝田 みな

Mina Katsuda

目次

はじめに

I. 専門教科「生活」の講義について

- (1) 専門教科「生活」の講義計画
- (2) 実践
- (3) 成果と評価

II. コミュニケーション能力を育成するために

- (1) 導入のねらい — 構成的グループエンカウンターなどを取り入れる—
- (2) 実践
- (3) 成果と評価

III. 保育者視点で子どもたちへ気付きを与えるために

- (1) 学生が気付くことの大切さ
- (2) 保育者視点で子どもたちへ「気付き」を与える

おわりに

はじめに

体験と知識について國分（2012）は『18歳からの人生デザイン』の中で「体験を通さないで、知識だけだと慢心が生じます。しかし、体験だけでは迷いが生じます。文字や言葉で覚える学問と、体験で会得する学問と、この二つを統合することが大切です」と述べている。教育について学ぶ学生も自分自身のキャリアを考えると、知識に加え、体験を通してこそ自分の進む道にかかわる何らかの「気付き」を得ることができるのではないか。

また、幼児期の教育（幼稚園、保育所、認定こども園における教育）では、直接的な体験が基盤になっている。菅野（2009）は「子どもの成長にとっての『体験』は、①視野が広がる、②自分の〈輪郭〉が明確になる、③洞察力の深まる、④人間関係を育てる、ものである」と述べ、これらの体験を通して子どもたちも何らかの「気付き」を得て、多くを学んでいくとしている。

さらに、体験は幼児期・児童期の教育において欠かせない。体験は、幼児期の教育と児

童期の教育それぞれの発達段階における役割と責任を果たしているとともに学びの連続性も担っている。子どもの発達や学びの幼・保・小の連続性が確保されることは、現在、小学校においても問題となっている「小1プロブレム」の発生防止につながるなどメリットは大きい（文部科学省 2010）。具体的な取り組みとして『愛知の幼児教育指針』（2012）では、「遊びを通して総合的な指導をする幼児教育と教科等の学習を中心とする小学校教育との違いを乗り越え、幼児が期待をもって小学校生活をスタートできるようにするとともに、幼児教育と小学校教育の目標を連続性のあるものとして捉えて、教育活動を行っていくことが大切」としている。「幼児期の遊びがどのように深まり、広がっていくのかを見通す」ことや「児童期の育ちを見通した教育課程・保育課程を編成する」ことに着目し、幼児期の終わりまでに育ててほしい幼児の具体的な姿をイメージした教育活動を行うことが重要になってくる。

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 生活編』の中で「気付き」の定義を「気付きは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには、知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。また、気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる」としている。田村（2012）は「この気付きの定義を明確にすることにより実践の質的な向上を期待し、この気付きが明らかになることによって気付きの質を高めるイメージがもてることとなる」と述べている。これは、一般的な「気付く」という範囲を超え、直接体験をくり返したり他者とのかかわりを深めたりすることで、自分自身が主体的に自発的に活動することによって、思い、感じ、考えることが欠かせないということにつながる。

では、「気付きの質を高める」とはどのようなことなのか。田村（2012）は「子どもの気付きの質を高めるには、単元や学習環境の構成、具体的な学習指導が重要となる」とし、「教師自身が気付きの質を高める子どもの姿をイメージできないことには、実践化できない」とも述べている。教師自身の気付きも、やはり、体験を通じて、教師自身の思考、感情、行動に働きかけることで身に付いてくるものである。子どもたちの気付きの質を高めるためにも、内藤（2007）は、「教師が子どもたちの気付きを知的なものとしてとらえ、見過ごさず、大切にしましょう。そして、子どもたちにその気付きを価値付けて、返してあげましょう」と述べ、子どもたちが発することばに触れ、感動しみんなで共有する。そのためにも、内藤（2007）は、「教師は子どもたちのステキなことばに立ち止まることができるかどうか大切になるものだ」と、教師が一人一人の子どもの気付きをいかに見取り、価値付けて返していけるかが重要であり、知的な活動にさせるためにも、活動の質を変えるなどして、教師が確かな目を養う必要がある。

教師が確かな目を養うためには、養成校の学生が積極的に取り組めるように講義では工夫が必要である。岩崎・伏見（2003）は、「(1)実習を取り入れる、(2)受講生に対する調査データを用いて、授業プランを説明する、(3)取り上げるトピックに関連した問題を課す、

(4)臨場感を出した実践記録の読みをおこさせる、(5)視聴するVTRは、私たち自身が参観した授業であることを原則とする」など、講義内容をより良く把握できるように、工夫をしている。学生も講義内で体験が必要であり、体験から学生自身の思考・感情・行動に働きかけをさせていく。

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領 生活』の目標で、「(3)身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにする」が新しく設置された。宮野(2012)は「一人一人の気付きを共有し、伝え合いながら、互いに高め合うことが重要であり、伝え合い交流する場をもち、一層気付きの質を高めていくといえる」と述べている。伝え合い交流するということは、言い換えれば「コミュニケーション」を意味する。「コミュニケーション」とは「気持ち・意見などを、言葉などを通じて相手に伝えること。通じあい」を指し、人として相互にふれあいかかわり合うことである。

現在、人とかかわりがうまくいかないとの理由でトラブルが増え、意思の疎通ができずさまざまなストレスをかかえてしまう人が増えてきており、低年齢化している。社会的な背景や生活環境の変化などでストレス社会といわれ、人とかかわりを避けても生活が送れるような日常にもなっている。新しく設置されたこの目標は、教科の中の目標ではあるが、体験や活動から気付いたこと感じたことを表現し、相互にやり取りを繰り返しながら、自分自身の行動の変容につながっていく点から鑑みると、学生自身の将来の夢や希望を考えていくことのポイントにもなっている。

保育者として働こうとしている学生には、人間関係の楽しみを味わわせ、他者の考えをじっくり聴いたり、自分の考えを話したり、それらを進める、強める、深めることに慣れさせていく。そして、共感的理解を経験することによって、集団での自分の居場所を確立し、やがて自立した個人として成長していく。また、子どもたちを教える立場になるので、そのために考えることとして杉山(1994)は『『子どもから学ぶ教師』として大切なものは、①あたたかさ、②やわらかさ、③視野の広さ、④想像性の豊かさ、⑤人間としての良心が必要だ」と述べている。保育者は子どもの成長を願い、また、自分自身何が欠けているのかという問いを持ちながら働く。保育者として人と接する、添う、慕う、これらを日々実践することにより、さまざまな波風に対しても乗り切れる強い精神力を身に付け、圧力に屈しない心身ともにたくましい心が育てられていくことから人間関係がはじまる。

本研究の目的は、生活科が「互いに支え合い補いながら、豊かな生活を生み出していくことに役立てられるもの」(野田2008)であるという考えのもと、専門教科「生活」の講義の中で、学生自身が、将来への希望に向かって前向きに生きることが大切であることに「気付く」ようにしたい。さらには将来、保育者として多くの人々とかかわる仕事に就くことを目標としているため、コミュニケーション能力を高めるためにどのような体験を講義の中に取り入れていくことが効果的であるのかも考えていく。

I. 専門教科「生活」の講義について

専門教科「生活」の講義は、1年生後期（2セメスター）に開講され、幼稚園教諭免許資格取得に必要な教科である。本講義を受講する2セメスターは、夏休み明けということもあるが、学生は大学生活にも慣れ、勉強、サークル活動、アルバイト等でそれぞれが個々に輝ける場を見つけながら活動できる時期でもある。

学生同士の様子を見てみると、入学当初仲良くなった友人だけのかかわりが中心になり、40数名の学科全体でのかかわりはほとんどない。顔は知っているが名前は覚えていないと話す学生もいる。このことはグループでの活動を中心にして講義を展開させている専門教科「生活」において、グループメンバーをランダムに決定し活動を始めるときに、同じグループの人の中には初めて話した人がいたという感想を学生から聞き、学生同士の人間関係が把握できた点である。固定化された人間関係の狭い世界でのかかわりが入学当初から続いていることを知るようになった。

しかし、大学卒業後の人間関係は、これまでの限られた範囲から突然大きく幅が広がる。特に本講義を受講している学生の多くが保育者として幼稚園や保育所に勤めることになる。現在、保護者対応の難しさは小・中学校も幼稚園や保育所においても、同様である。

さらにインクルーシブ教育の考え方の浸透により、通常学級において特別支援教育を必要とする子どもたちへの適切な教育的支援が求められている。したがって、新米保育者には、さまざまなタイプの人間に対応していく覚悟とスムーズに対応できるスキルが必要とされる。

また、『子ども・若者育成支援推進法』（2009）は、「子ども・若者をめぐる環境が悪化し、社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者の問題が深刻な状況にあることを踏まえ、子ども・若者の健やかな育成、子ども・若者が社会生活を円滑に営むことができるようにするための支援その他の取組について、その理念、国及び地方公共団体の責務並びに施策の基本となる事項を定める」ことを目的としている。そして、「子ども・若者育成支援において、家庭、学校、職域、地域その他の社会のあらゆる分野におけるすべての構成員が、各々の役割を果たすとともに、相互に協力しながら一体的に取り組むこと」を基本理念の一つとしている。したがって教育に携わる学校や幼稚園・保育所が、この取組の重要な担い手となる。

これらのことを、学生に専門教科「生活」の講義の中で随時取り上げ、卒業後に保育者として果たすべき役割に気付かせるようにしている。また毎講義で構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、グループワークトレーニングなどを取り入れて、教室内は「自分の思いを受け止めてくれる場所」として「自分を表現する」、「体験を分かち合う」、「ソーシャルスキルを身に付ける」ことを体験させ、それぞれの学生が何らかの「気付き」を得ることを目的にしている。

(1) 専門教科「生活」の講義計画

専門教科「生活」の学修目標は、①生活科の目標と内容、子どもへの活動支援について理解を深める、②体験や活動を楽しみ、その過程で起こる気付きを思考力の芽生えととらえ、具体的な事例を通して目標を達成する、③幼児教育と小学校教育との連携について考察する、とした。

講義方法は、個人やグループによる調査活動や体験活動、およびその発表、ディスカッション等を通して実践力を身に付けさせる。毎回グループワークを行い、プリントにまとめさせる。具体的な内容は、保育園運動会参与観察、学内探検調査、クリスマス会企画運営、生活科授業案、幼・保・小の連携について行った。また、プリントに書かれた学生の意見や考えには必ずコメントを書き、紙面上でのコミュニケーションを確立させた。複数の学生からは、コメントを読んで「考えや思いを理解してもらい嬉しい」との感想があった。

(2) 実践

① 保育園運動会の参与観察について

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領 生活』内容(3)「地域と生活」では、地域の「人」に目を向けるとあり、野田（2008）は、「子どもたちに、地域で生活したり働いたりしている人々の姿を見たり、話を聞いたり、仕事を手伝わせてもらったりなどして、身近に多様な人々が生活していることや、地域には様々な仕事がありそれらの仕事に携わっている人がいることに気付いたりする」としている。そこで、保育園など地域のさまざまな場所やそこで働く人との出会いをつくり、保育士視点で行事に参加させることにより、子どもの思いや願いを大切に、地域やそこにいる人への愛着を育てるよう活動を行うことが望まれる点を意識して指導した。

ところで、文部科学省（2011）『短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究』において「短期大学卒業生を採用した就職先は、入職直後は組織の中で行動がとれることを新入職員に求めていることがわかる。学生から社会人へと転換して、組織人としての基本行動がとれることが重視されている。具体的には、組織のルールを守り、基本的な生活習慣を転換し、チームワークやコミュニケーションを重視できることに重点が置かれる」と報告されているように、チームワークやコミュニケーションを現場の保育士たちは運動会という行事の中で具体的にどのようなようにしているのかを間近に観察させる絶好の機会である。

事前授業で保育園園長に運動会行事の目標、保育士たちの動き、注意点などを話していただいた。また、園児とともに競技に参加するため、学生たちはお面の制作をした。園児が喜ぶ顔を思い浮かべながら、また、お面を付けたときにけがをしないように細心の注意を払うことなどを指導した。

専門教科「生活」の講義では運動会参与観察については『行事』を保育の軸に一『ねらい』の実現プロセスを大事にした運動会に一」というテーマで進めた。行事を「子どもの発達の大変な節目」と位置付けている園では、練習の過程で、子どもの意欲を引き出し、どういう力を育てるのか、そのためには、どう援助し、かかわり見守って育てていくか保育士同士で確認しあう。そして、①運動会まではこのような流れで「教職員全体がねらいをしっかりとつかむ」、②できる、できないよりも大切にしたいこと、③I 保育園運動会で見てくることを考えてみましょう、など保育者目線で、どのような動きを先生たちはしているのか考えさせ、テーマを各自が持って観察をした（運動会資料、神奈川O 保育園、大阪N 保育園を参考にして構成）。

どのような視点で観察するのかは、「職務で基本的に必要な、子どもへの関心や子どもが好きであること、保育所に特徴的な能力として、環境整備力がある。保育所では、職員が自ら気付いて、保育のために必要な環境を整備する力をあげている」（文部科学省2011）を参考に考えさせた。学生が考える視点として、「運動会には多くの保護者や地域の人が来園するので笑顔で接する」、「演技がスムーズに進むように準備や後片付けはてきぱきと行う」、「子どもが転倒した場合、けががないようにするために園庭の石拾いをしたり、遊具を移動させたりして運動会用の園庭をセッティングし、環境作りを細部までこだわる」などであった。

また、子どもたちへの声かけを学ぶソーシャルスキルトレーニングとして、なわとびができなかった子どもができるようになる例で考えさせた。それは教え合うグループの励ます力が大きく、なわとびができなかった子どもこれでいいのかなと感じるようになり、何度も練習してとうとうできるようになった場合、保育者として①その子にどんな声かけをするのか、②教え合うグループメンバーにどんな声かけをするのかを考えさせた。まず、個人で考えさせ、メンバー同士意見交換し、そしてシェアリングを行った。この意見でよいのか不安になる学生がいたり、メンバーの意見を聞いて、そういう意見もあるのだと新たな気づきを得たと感じる学生もいたりした。

運動会当日は、学生も、一保育士となるため、服装などを含めた身だしなみは保育士としてふさわしいもので参加させた。ふさわしい身だしなみについての学生の考えは多様であり、長い髪をしばる、化粧はナチュラルもしくはしない、T シャツはシンプルなデザインで華美過ぎないもの、えりが開きすぎていないもの、ジャージのパンツはサイズの合ったものを着用、スニーカーを履くようにさせた。基本的な身だしなみに近づけない学生には個別に指導したものの、保育士のイメージをどのように持っているのか困惑した。

作成したお面を取りに行く競技では、学生は3人一組で馬を組み、園児を乗せて参加した。園児に明るく声をかけ、馬に乗せるときは優しく乗せ、どのお面を取りに行きたいのか、学生なりに園児へのことばがけを考えて楽しく行動していた。園児が「これがいい」と言った時、馬を組みんでいた学生が作ったお面だったことで、学生は喜んでいて、このよ

うに園児とのふれあいから学生は、「自分自身への気付き」を感じ取ることができ、自分のよさや可能性に気付くことになった。

事後授業では、学生に運動会参加について(1)最も心に残ったこと、(2)I 保育園の保育士だったらどんなことに気を付けて運動会の指導をしたか、(3)運動会に参加して学んだことなどをふりかえり感想を書かせた。その感想文は保育園の園長にも見ていただいた。学生が保育士目線でどのように書いたのか興味深く、中でも、「プログラムが頭に入っている」、「白線上に水をまく」、「砂をポケットに入れた先生」についての感想にはそこまで保育士の動きを見ていた学生の気付きに感心されていた。

園長から運動会反省会を保育士同士で行った時のこと、運動会などの行事を行うときの注意点や保育士の仕事全般についてなどお話を聞いた。実際に保育現場において、保育士の立場を考えながら競技に参加したり観察したりして体験することができたことにより、学生は保育士としての仕事の厳しさや尊さを認識することができ、保育士としての仕事に対する充実感を得ることができた。

② クリスマス会企画運営について

文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』の中で、「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分に検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること」とある。また、文部科学省（2008）『小学校学習指導要領 生活』では、「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする」とある。野田（2008）は、「昔から自然や季節を生活に取り入れ、楽しく工夫してきたことを知り、季節と自分の生活とにつながりがあることに気付くことにより、身近な自然や今まで経験してきた行事がいっそうの価値をもつものになるのです」と解説しているように、行事は園や学校ならではの大事な取り組みになっている。

12月の行事として「クリスマス会」を催す園がある。季節の変化を取り入れて生活を楽しく工夫していく子どもを育てることが求められており、学生が幼稚園教諭として勤務することになったのなら、クリスマス会でどのような遊びを企画・運営をし、幼稚園教諭の視点で子どもたちに何を伝えたいのかを実際にクリスマス会を開催することによって考えさせた。どのような視点で観察するのかは、幼稚園教諭には「『園児のモデルとしてふさわしい行動がとれること』をあげており、教員として規範的な態度や行動をとれることを求めている。さらには、『パソコン・ピアノ・体育表現などのスキル』、『資料整理力』、『環境整備能力』などの個別スキルが必要であり、『保護者の対応』も必要とされる。コミュニケーション能力を要する」（文部科学省 2011）との指摘を参考にして考えさせた。

各グループの発表内容は、絵本読み聞かせ、コント、ダンス、手遊び、合唱、合奏、寸劇、マジックなどである。グループの人数は2人～8人までとし、出し物を披露する対象年齢・人数をあらかじめ考えさせた。グループ全員が協力して行うとともに、見ている人を飽きさせないように楽しませることも重要なため、メンバーが揃いの服を着る、揃いの小物を持つなど演出にも工夫させ、まずは、「クリスマス会が楽しい」と思えるような進行をさせた。

クリスマス会の運営では、司会者、スタッフを中心に、教室環境整備、飾り付け、準備、後片付けなどの担当者を設け、特に司会者、スタッフには会の全体像を意識させ、時間の管理と明るい雰囲気を醸成するための工夫を考えさせた。

自分たちのグループの発表だけで終わることなく、他のグループが発表しているときには発表グループが幼稚園教諭の視点で発表していたのか、発表内容は子どもたちが興味を持って参加したいと思えるものなのかを考えさせた。「表現」の授業においても同様の内容を取り扱っているだろうが、専門教科「生活」の講義では学生が体験をして気付きを得ることと保育者の目線で考えさせることが目的なので、クリスマス会は学生自身の体験と保育者の立場と同時に考えさせることが可能であった。各グループの発表内容は、絵本読み聞かせ、ハンドベル演奏、クリスマスクイズ、人形劇、紙芝居だった。発表時にどのような点に気を付けるとよいのかを話し合った。学生自身の発表では「笑顔で発表する」、「声の大きさ、早さなど話し方」、「全体を見渡すように視線を配る」だった。

クリスマス会当日はそれぞれのグループの準備もあるが、司会者やスタッフが教室環境整備、飾り付けを行っているのを手伝う学生もあり、一つの行事に向かってチームワークやコミュニケーションを大切にすることに重点を置いていたことが理解できる。

シェアリングでは、①自分たちの発表の中でよかった点、改善点、②他のグループのよかったところ、③幼稚園教諭の視点、④司会者やスタッフの動きなどを考えさせた。自分たちの発表、他のグループの発表だけでなく、スタッフの動きや幼稚園教諭の視点でクリスマス会を見渡すことにより、ものごとを客観的に見ることができるように指導した。

(3) 成果と評価

専門教科「生活」の講義の中で、学生自身が、将来への希望に向かって前向きに生きることが大切であることに「気付く」ようにしたいという本研究目的に保育園運動会の参与観察とクリスマス会企画運営の二つの実践で、どこまで達成できたのか考えていく。

2年生からの幼稚園実習、3年生からの保育所実習、施設実習に向けて、1年生のうちに講義の中でこのような保育体験ができることは学生にとって意義がある。それは、理論を学ぶだけではなく実際に体験して初めて感じ、思い考え、行動に働きかける点がいかに重要か理解させるために効果的な方法だからである。梅崎・田澤（2013）は、「実習授業の特徴は、学外の『他者』と接触し、そのコミュニケーションの過程で意識変化を生み出

すことである」と述べ、「他者」の役割の重要性は、以前から指摘されてきたという。また、下村（2008）は「他者との付き合いが他者との意見の相違を生み出し、他者と異なる自分の発見に繋がること」を指摘している。この指摘から言えるのは、特に保育園園長から直接話を聞いた体験は、学生の思考・感情に刺激があり、はじめて知ったこと、わかったことなど気付きを得ることができた。保育者をめざす学生は、将来、多くの人とかかわっていくことになるので、人とかかわりに積極的になるためにあえて他者とかかわりを意図的に作っていくことが重要になってくる。その点に関しては、二つの実践を取り入れたことは学生からの以下の感想からも成果が現れたと言える。

保育園運動会の参与観察の感想として、学生は「安全面に気を配っていた。たとえば、遊具を園庭の端に移動させ、使用できないようにひもで縛る、石拾いをして転倒でのけがの予防」、「運動会のプログラムがすべて頭に入っていた」、「競技の準備や片付けは迅速に行っていた」、「ライン引きを使って白線を引いた後、じょうろで水をその白線の上にまき、風で石灰が舞わないようにしていた」、「子どもが声をかけてきたら、その子に集中し子ども目線で話していた」、「うまく競技がいかなかった子にも励ましの声をかけていた」、「保護者や地域の人にも笑顔で対応していた」、「子どもから『プレゼントあげる』と言って園庭の砂をもらった先生が『ありがとう』とその砂をポケットに入れていた」と述べていた。

また、クリスマス会企画運営の感想では、幼稚園教諭の視点で「園児のモデルとしてふさわしい行動がとれること」、司会者やスタッフの動きなどへの視点の中で「環境整備能力」を中心にふりかえった。感想は、「子どもの表情を見ながら発表する」、「明るく笑顔」、「集中しているかどうかを確認してから始める」、「自分が幼稚園の先生にあこがれたようにその先生に近づきたい」、「子ども目線で」と述べていた。司会者やスタッフの視点からは、「時間配分」、「器具の出し入れをスムーズにさせるための工夫」、「明るい雰囲気作り」、「拍手はリズムカルに行く」だった。

一方で、これらの体験が2年半後、就職を考える時期に入り、その時にこの専門教科「生活」で学んだ体験が果たして役に立っているのかどうかである。就職に役立てる前に、たとえば実習先で役に立つかどうかである。体験が終了したときはあれこれと考えを巡らせることはできたかもしれないが、実習や就職に役に立つかどうかは現時点で見当がつかない状況である。少しでも学生自身が役立てたいと思ってもらえるように日頃から将来への希望に向かって進んでいくための支援として学生の声に耳を傾けていく。

講義の評価は学科の平均をやや下回る結果で、学生からのコメントには手厳しい内容もあった。それらは、「必修科目だから仕方なく受講」、「授業は疲れる」、「体験と言っても段取りが悪すぎる」、「嫌い」だった。この専門教科「生活」は幼稚園教諭2種免許取得必修科目であるが、学生の受講意欲はあまり高くない教科である。そして、体験としてグループ活動を中心に言い、ランダムにメンバーが構成されるため、普段は、なかなかかかわり

のない者同士でグループ活動を行うことが多い。グループ活動の内容は構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、グループワークトレーニングなどであるが、グループの雰囲気メンバー構成により左右される。明るく活気のあるグループで受講するばかりではなく、つまらないと終始感じながらの受講では、マイナスに感じる学生が増えてくる。自分から進んで明るく楽しい雰囲気を作る努力をするよう話しても、相手に受け入れられないのではないか、どうせ変わらない、別に楽しくなくてもいい、などと解釈して、かかわり度合いが低くなってしまう。このように感じている学生の受講意識にも耳を傾け、貴重な意見として受け止めていかなければならない。

II. コミュニケーション能力を育成するために

(1) 導入のねらい ―構成的グループエンカウンターなどを取り入れる―

構成的グループエンカウンターは、エクササイズを通して、心と心がふれあい、自他の発見を目標とし、個人の行動変容、人間的な成長を図ることをねらいとしている（國分康孝・國分久子 2005）。

エクササイズとは、『ふれあい体験と自他発見』を深めるために行う課題であり、構成的グループエンカウンターの重要な柱の1つである」と定義されている。エクササイズは、意図的に枠を作り、参加者のふれあいや気付きにつなげ、エクササイズの実施とそのふりかえり（「シェアリング」）によって、思考・感情・行動のいずれかがゆさぶられ「ふれあい」と「自他発見」が促される。「シェアリング」とは、エクササイズで体験したことを分かち合うことである。分かち合うことにより、思考・感情・行動を修正・拡大することが目的である。「構成的グループエンカウンターのエクササイズやシェアリングで自己開示をくり返していると、そのうちほんとうの自分に気付いていく」（日本教育カウンセラー協会 2012）。この気付きを感得し自己発見をしていくことこそが、自分のキャリアを考える上においても大事な点である。

エクササイズは学生の実態に応じたものを取り入れ、自己表現が苦手であったり、自己開示がなかなかできなかつたりする学生でも無理なく参加できるものを取り入れている。これまで活動や体験の経験が乏しかった学生にとっては、エクササイズの体験により自分の世界を広げることができるとともに、他者のことを知ることができる機会になる。いきなり、社会体験をするのではなく、大学での講義という限定された枠組みの中での体験であるため抵抗感が少ない。しかもルールを徹底することや無理強いをしないことにより、個々の心の状態に応じた体験を進めることができる。

いくつかエクササイズを進めていくうちに、自然と他者との触れ合いができるようになり、自己表現や自己開示によりコミュニケーション能力を高めることができるようになる。徐々に大学の講義外での活動や体験についても勇気を持って挑戦することができるように

なってくる。

そのほかにも、ソーシャルスキルトレーニングやグループワークトレーニングも積極的に取り入れてコミュニケーション能力を高める工夫を行ってきた。

(2) 実践

人とかかわる機会を増やすために席替えは毎回行った。座席は筆者がランダムに考え、1グループが4人～5人になるように設定した。普段あまり話したことがない友人と同じグループになり、グループ活動を展開していくことが多かった。専門教科「生活」の講義で守ってほしいこととして、自分から楽しむ、笑顔で素直な気持ちで参加する、グループメンバーと仲良くする、人の話は最後まで聴く、批判をしない、講義を休まないというルールを設けた。実践したエクササイズとその時の様子と効果について三つの事例を挙げる。

① エクササイズ「ニックネームを自分で付ける」

自分らしさが出せるようなニックネームを考える。好きな色のマジックでニックネームを書き、机上用名札を作成した。

次にグループ内で自己紹介をする。自己紹介のやり方は、まず、ニックネームを言う。なぜそのニックネームにしたのか理由を言う。ほかのメンバーは発表者へ顔を向け笑顔で聴く。話し終わったところで拍手をする。

全員の自己紹介が終了したところでシェアリングを行い、このエクササイズを体験してみて感じたこと、気付いたことを自由に話し合ってみた。シェアリングは時間制限を設けた。

学生の感想は、「思いつかないので名前をそのままニックネームにしたが、人の話を聴いていて納得できるものもあった」、「中学から呼ばれているからニックネームにした」、「ニックネームで呼ぶと自分だが自分でないような気がした」などであった。「シェアリングの意義として自己理解・他者理解を通して、自分への気付きが深まる」と國分(2005)が述べるように体験から気付きへつながる点は、専門教科「生活」の目標と合致している。

② エクササイズ「スキスキ・ランド」(大竹直子 2005)

自分の好きなものはなんですか？ ワークシートのトラックには1つずつテーマが書いてあり、全部で12のテーマに答えていく。「これが一番好き」という理由や、「私はなぜこれが一番好きなのかな」と考えることによって自己理解を促していく。テーマの答えをグループ内で発表する。メンバーの発表を聴き、自分と比べてみる。自分が発表してどう感じたのか、メンバーの発表を聴きどう感じたのかなどシェアリングを行う。人の意見を聴いて何を感じ、何を思い、自分の思考・感情と照らし合わせ、次への行動に移るきっかけにさせる。

③ エクササイズ「どのように見えますか？」

「老女と婦人」、「二人は何をしているところ？」の絵を見て、自分にはどのように見えるのかを考える。年齢、職業、趣味、性格などを自由に考えさせた。

「老女と婦人」では見方によって老女にも見え、婦人にも見える。二人を同時に見ることもできる。同じ絵を見ていても視点によって老女にも婦人にも見えるということは、自分が見えている世界だけが唯一絶対の世界ではないことが理解できるわけである。また、婦人に見えるという意見が同じであっても、年齢、職業などテーマによって感じ方が違う。

「二人は何をしているところ？」では、男女の友人、恋人、夫婦、男同士、女同士、見ず知らずの他人同士など、二人の関係はいろいろ考えられる。年齢、職業について想像すると考え方の幅がさらに広がり、人にはいろいろなとらえ方や見方があることを理解することができる。このエクササイズでは、自分がどのように見えるのか理由づけがきちんとできているのが最も大切であり、次に大切なことはメンバーが理由を聞いて何を感じるのかを知ることである。

メンバー全員が発表し終えたら、シェアリングを行い、自分とメンバーの同じ点と相違点を認め、『今ここでの体験』を掘り下げることができるのか、つまり、自己表現することによって明確化され、さらに分かち合うことによって、新たな気付きが生まれ、自己や他者の気持ちを感じ取ることができるのである」と、大友（2005）は述べている。いろいろな価値観を人は持っていて、どの部分が自分と同じでどの部分が違うのだろうかという思考の幅を理解するには学生にとってよい体験であった。

(3) 成果と評価

本研究の二つ目の目的は「コミュニケーション能力を高めるためにどのような体験を講義の中に取り入れていくことが効果的であるのか」である。

「コミュニケーション」という言葉が使われているタイトルの書籍がたくさん出ているにもかかわらず、コミュニケーションが取れないという理由で生きづらさを感じている若者が多い。本学の学生も普段話さない人と同じグループになると何を話していいのか、どのような表情を表せばよいのか戸惑うと言う。保育者として教えるためのテクニックだけを会得するのではなく、聞き上手になったりコミュニケーション能力を向上させたりするために、保育者は多様なかわりを持つことが必要である。そして、一人一人の子どもへのかかわり方を子どもの側に立って考えること、保育者目線で考えることを促してきた。さらに、子どもたちの気持ちを聴きとり、適切に対応していくことは、保育者自身が心の安定、安心が得られないと困難である。そして、人のかかわり方が社会人としてまた保育者としてできるかどうかは今後の課題である。

「生活」では子どもと同じ目線でかかわることが重要視されている。子どもの思いに心を寄せ、教師自身も心を開くには、学生自身がこのような体験を行う必要がある。体験の

少ない学生にはせめて講義の中だけでも体験させ適切な行動につなげていくようにさせたい。また、口下手でシェアリング時にはなかなか話せない学生もいるため、毎時間プリントに本時のまとめを全員に書かせている。そこには自分の考えや感想を書かせているが、学生の意見等に筆者は必ずペンを入れる。プリントを介して自分の気付きを整理し筆者に伝えることができるので、プリントでのコミュニケーションは効果的である。

今回の三つの事例は、それぞれが特徴のあるエクササイズである。ゲームとしてやりっぱなしではなく、決められたルールのもとエクササイズの後にはシェアリングが欠かせなかった。大友（2005）が、「悲しいとかつらいとかいう体験を自分の感情を言葉にし、それがメンバーに受容され共感される。そのような体験を通して自分自身の存在意識が認められたと実感できたとき、自分を受容できるようになるのである」と述べているように、シェアリングの体験を掘り下げていくことによって、自分自身を受け止められるようにした。

コミュニケーション能力は保育者になるためだけに必要なものではなく、生きていく上で必要な能力である。講義の中で行ったエクササイズで体験したことは、日常生活でどのように役立たせることができるのか、すぐに使えるのかしばらく経ってからなのか、いつどこで自分が使えるのかは学生自身もわからないが、講義の中に取り入れたエクササイズの体験をまず取り組むことを目的とし、さらに日常生活で活用することによって、コミュニケーション能力が高まっていくことを願う。

Ⅲ. 保育者視点で子どもたちへ気付きを与えるために

(1) 学生が気付くことの大切さ

さまざまな理由で、幼児期からの「体験」が不足している学生が少なからずいるという実態がある。また、小学校での生活科の授業を受けることができなかった学生（たとえば不登校の経験があった）、受けても「体験」活動があまりできなかった学生もいる。その後もさまざまな「体験」活動ができなかった学生は、十分に「気付き」が得られないまま大学生になってしまっている。そのような学生は結果的に、小学校生活科の目標である「自立への基礎を養う」ができていない。そのため、自立の三つの側面である、①学習上の自立、②生活上の自立、③精神的な自立が、不十分である恐れがある。

卒業後、保育士として、幼稚園・保育所等で子どもたちに体験や活動をさせ、「気付き」を大切にする指導を行うには、まずは自分自身が体験や活動を通して「気付く」ことが大切である。「気付き」を得られるきっかけや時間を捻出するのは困難である。したがって、「気付き」を与えるための専門教科「生活」をめざし、学生が自分の体験で何を思い、考え、行動したのかをまとめさせる。そして、専門教科「生活」の講義の時間の中で、学生自身が気付く大切さを実感できるようにしていきたい。

(2) 保育者視点で子どもたちへ「気付き」を与える

文部科学省（2008）『小学校指導要領 生活』の目標には、「地域のよさに気付くこと」、「自然のすばらしさに気付くこと」、「自分のよさや可能性に気付くこと」が挙げられている。保育者として、子どもたちにこれらの「気付き」を与えるためには、どのような具体的な活動や体験を行えばよいのか、学生に考えさせていく。そして、これらの「気付き」が、子どもたちの自立の基礎を培っていくことを学生に認識させる。認識させるには、身近なところに保育者や教員がいるやよい書籍があるなど、学生にとって、モデルになり得る人やその人の著書があったりするとイメージが持ちやすい。よきモデルと出会い、話を聞いたりその人の人となりに触れたり、そこから思考・感情・体験のサイクルを回していけると保育者視点で子どもたちへ「気付き」を与えることが可能になるのではないだろうか。

おわりに

就職活動の時期に入っても、まだ、やりたいことが見つからないという人が大勢いる。その点、本学のように保育者を目指すという思いを持って入学した学生は、目標を入学当初から持ち続けているので、進路選択に大きく困ることはほとんどない。しかし、人とかかわる仕事に就きたいと思っても、コミュニケーションが上手に取れない、人見知りする、知らない人とかかわれない、人から怒られるのはいやだ、苦しいことは避けたいなど保育職に就く前から不安や弱気になっている学生もいる。

専門教科「生活」の学修目標を3点掲げたが、中でも「②体験や活動を楽しみ、その過程で起こる気付きを思考力の芽生えととらえ、具体的な事例を通して目標を達成する」、では体験をくり返すことにより小さな成功体験を積み重ね安心感と強い気持ちを身に付けさせ、自信につなげていくことを考え指導した。ほめられた経験がない、認められた経験がほとんどないため、一つ一つできたことを承認し、周りからの評価を得る経験の場を設けた。これがやがて「自立への基礎を養うこと」になる。そのような願いから、学生が希望をもって保育職に就いてからも、長く勤められるように本学にて、いつでも相談できる環境作りをしている。また、後輩へのアドバイスなどを卒業生が行う機会を定期的に設けている。

また、コミュニケーションが重要な点は学生自身も理解しているが、講義の中だけではなく学んだことを学生生活で活用できるために、学生とのコミュニケーションをまず筆者からかかわっていくことは継続して行っていく。

残された課題も多い。第一に、専門教科「生活」の講義15回だけでコミュニケーション能力を育成していく取り組みは学生一人一人に合った的確な方法であったのかどうか。もともと人とかかわりに苦手意識を持っている学生であれば、毎回のグループのメンバー

によって楽しく思えたり苦痛に感じたりする。自ら楽しく行動しようとなかなか思うことができない。講義の感想を書いたプリントに丁寧に答えることによって、筆者とのコミュニケーションを築き、一人一人と向き合ってきたが、話を聴いてもらえたという体験を紙ベースでも行っていきたい。第二に、コミュニケーション能力を高めた結果が就職活動や実習に役に立ったのかどうか。これは、働いているときや実習中にはわかりにくいものである。しかし、うまくいかなかったと思われたことが、簡単に終わったり、いつまでも気にならなくなったりといった感覚を味わわせたい。

さらに専門教科「生活」の講義が、日常生活で生かすことができるとともに将来の仕事に結びつけられるコミュニケーション能力育成として相応しい内容であったのかどうかは、学生が在学中ということもあり、結果として明らかにすることができていない。

なお、本論文はその一部を日本保育学会第66回大会にて発表した。

【引用文献】

愛知県教育委員会（2012）「愛知の幼児教育指針」

<http://www.pref.aichi.jp/0000058173.html> 2014.2.20

梅崎修・田澤実（2013）『大学生の学びとキャリア』法政大学出版社

大竹直子（2005）『とじ込み式自己表現ワークシート〈1〉教室で 保護者会で 保健室で 相談室で すぐに使える！』図書文化

大友秀人（2005）『構成的グループエンカウンター事典』図書文化

國分康孝（2012）『18歳からの人生デザイン』図書文化

國分康孝・國分久子（2005）『構成的グループエンカウンター事典』図書文化

杉山浩之（1994）『新世紀に生きる子どもの自立』法政出版

内閣府（2009）「子ども若者育成支援推進法」

http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/pdf/s_law.pdf#search=%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E3%83%BB%E8%8B%A5%E8%80%85%E8%82%B2%E6%88%90%E6%94%AF%E6%8F%B4%E6%8E%A8%E9%80%B2%E6%B3%95 2014.2.20

内藤博愛（2007）『気付きを深める生活科授業の創造』明治図書

日本教育カウンセラー協会（2012）『ピアヘルパーハンドブック』図書文化

野田敦敬（2008）『小学校学習指導要領の解説と展開 生活編』日本文教出版

原田信之・須本良夫・友田靖雄（2012）『気付きの質を高める生活科指導法』東洋館出版社

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領 生活』東京書籍

文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』チャイルド本社

文部科学省（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/045/siryo/_icsFiles/afieldfile/2010/12/02/1299259_11.pdf 2014.2.20

文部科学省（2011）「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/07/04/1307545_1.pdf 2014.2.20